

ペスタロッチー教育賞 受賞者紹介

社会福祉法人麦の子会 理事長兼総合施設長

きた がわ さと こ
北 川 聡 子 氏

1960年生まれ。1983年北星学園大学文学部社会福祉学科卒業，2005年アライアント国際大学・カリフォルニア臨床心理大学院日本校修了。公認心理師の資格を持つ。1983年に発達に困り感のある就学前の子どもとその親への支援のために、札幌市において認可外保育施設「麦の子学園」を設立。その後、試行錯誤の実践を繰り返しながら、社会福祉法人麦の子会(施設名は「むぎのこ」として成人部門・社会的養護部門・地域支援部門として事業を拡大し、「発達支援」「相談支援」「家族支援」「地域支援」を柱として個別的なニーズに応じた支援を行っている。

その支援の視点は、単に「問題のある」とされた家庭だけでなく、施設の利用者を囲む職員をも含めたコミュニティに向けられており、「子育ての村」というフレーズを使って子どもや家族が生きるための基盤をつくらうとしている。1983年に大学生4人で「ただやろうという思いだけで」始めた支援活動は、特定の理論やモデルに従った実践ではなく、目の前の子どもや家族のニーズに応えたいという若者の感性と行動力に支えられていた。ニーズに基づく支援を基本とすることで、その支援は乳幼児期から成人期へ、子どもの困り感だけでなく家族や周囲の人の困り感へと拡大してきた。1996年に社会福祉法人として認可された後、1997年には卒園児の保護者を中心にフリースクールを開設し、2003年の児童デイサービス事業に結実。1999年には成人期の利用者支援を目指した大人の通所施設開設のための募金活動を開始し、2001年に始めた養育困難な子どもへの里親制度を利用した支援は2006年にショートステイホームむぎのこ開設へと繋がっている。4人から始まった支援活動は、現在、500名以上の職員を抱える大きな事業に発展しており、その職員の三分の一は元利用者によって担われている。

「むぎのこ」が基本とするニーズに基づく支援は、目に見える顕在的なニーズにตอบสนองすることに留まらない。サンフランシスコで車椅子を利用する当事者から「療育を受けるたび



園舎写真

に自尊心が下がった」という話を聞いたことから、よかれと思った支援が当事者を傷つけることもありうることに気づいた北川氏は、障がいのある子ども個人を尊重し、肯定的にかかわることを重視してきた。障がいのある子どもとその家族には、はっきりと外から見えない、あるいは自ら語らない問題があることを踏まえ、ときに障がいのある子どもを受け入れられない家族の「弱さ」など、個々のニーズや悩みを受け止め合えるような安全な場(グループカウンセリングや自助グループ等)づくりを行っている。もともと明確な設計図があったというよりも、それぞれの子どもの育ちや親の困り感、ニーズひとつひとつにตอบสนองする中で結果的に生まれてきた「子育ての村」は、障がいのある子どもとその家族を地域全体で支える生きる基盤をつくらうという願いに駆動されており、その長年の草の根活動の理念は「子どもを育てるのは、村中の大人の知恵と力と愛が必要です」と掲げられた「むぎのこ」の療育基本方針に表れている。

障がいがある子どももいない子どもも、大切なかけがえのない命と捉え、困り感を抱えた子ども一人ひとりの尊厳回復を志すとともに、生きる基盤を支えるための家族支援、地域支援に取り組んでいる北川氏の活動は、周縁に置かれている人たちに手を差し伸べ、子どもたち自身の生活を支えるのみならず、その陶冶の場である家庭の重要性や人間の尊厳を守る社会への改革を説いたペスタロッチーの精神に繋がる。氏の長年の努力と功績に対し、第31回ペスタロッチー教育賞を贈呈し、心からの敬意を表すと同時に高く顕彰したい。